

石巻日赤 平成 23 年 4 月 7 日 レポート
東北大学産婦人科 菅原 準一

大学病院バスにて石巻日赤へ。石巻赤十字病院産婦人科部長千坂泰先生から直接お話を伺いました。(4月6日地元保健師から得られた情報も盛り込んでいます)

1. 石巻日赤病院の現状

肺炎などトリアージ(黄)の患者が多く、病院全体として定期手術はできない状態。

震災後 3/11-4/7 の期間で 100 分娩。

震災前は、日赤 50/月、開業医 100/月であったが、震災後は日赤 100/月。

残り 50 分娩/月は、避難している、もしくは死亡、行方不明。

病棟は、産婦人科、小児科混合病棟であったが、現在はほぼ産科で占めている。

震災直後から、分娩 3 日目、帝王切開 4 日目(埋没縫合)退院でベッドを回していた。

現時点では、急性期を過ぎ落ち着いてきたので、分娩 4 日目、帝王切開 6 日目退院へ変更予定。

常勤産婦人科医師 3 名の健康状態は良好。

学会からの支援医師派遣により、大変助かっています。とのこと。

今後の分娩数の推移は、全く予想がつかない。

2. 石巻地域開業医の現状

あべクリニック：4月4日に分娩開始、今後月30くらいのペースへ。(震災前は、月30-40ペース)

斎藤産婦人科：6月から分娩再開予定。

斎藤、川村先生：医師会館2階にて妊婦健診計画中。

本多、あねは産婦人科は全くめど立たず。

しらゆりクリニック、うつみクリニック、山本産婦人科でセミオープンシステム開始している。

3. 避難所

女川、南三陸(志津川)：

妊婦は女川 11 人、南三陸 22 人。地元保健師により把握されている。未受診妊婦はいない。

現時点ではなんとか自力で石巻地域で健診受けている。

牡鹿半島がやっと車通行可能となった。鮎川に 3 人妊婦いる。(一人は分娩済み、一人は車中分娩となった。一人は不明。)

南三陸にイスラエル隊がプレハブ設置して健診含め、医療活動。4月10日に退去予定、プレハブは残していただき、地元診療所として使用か。

石巻地域：

15エリア、約150くらいの避難所あり。

各エリアごとに日赤救護班が毎日巡回し、アセスメントシートによる情報収集、医療活動。感染症の制御が喫緊の課題。

4. 問題点

石巻地域には、約1000人の妊婦がいる。

日赤救護班による避難所の医療活動では、母子保健に人手が回らず、産婦人科ニーズが十分に吸い上げられていない。

分娩後、避難所に帰らなければならない妊婦の調査が不十分。

全国各自治体から提案された分娩受け入れ施設、宿泊施設、支援情報が、被災地にいきわたっていない。

女川、南三陸の妊婦の交通手段確保が不十分。

牡鹿半島（鮎川など）の被災状況、妊婦情報が十分把握されていない。

5. 被災地のニーズからみた支援内容など

(1)被災クリニックの復興支援

(2)避難所生活をしている妊婦の状態、ニーズ把握、今後の意向調査のため、母子保健に通じた保健師、助産師の人的支援。

(3)交通アクセス困難な、女川、南三陸などの妊婦への交通手段の確保、資金援助（健診バス、タクシーなど）

(4)14万台の車両が流れ、自動車を確保することが困難になっているので、保健師などへ車両提供。

(5)医療記録が流された妊婦への健診資金援助、感染症検査などを再検査する場合の負担軽減。

(6)分娩後、避難所で育児をしなければならない方への仮設住宅優先入居、宿泊施設の提供、グループホームなどの確保。

(7)全国から提案されている妊婦への支援情報（分娩受け入れ施設情報、宿泊施設、経済的支援内容）を集約して、被災地妊婦に提供。

(8)多くの方が職を失っているため、中長期的な住宅、食事、衣料などの提供方法を検討。

情報の共有、収集の一元的管理が理想であるが、現状では困難。

地元保健師、日赤救護班—石巻赤十字産科千坂先生—東北大産科菅原、新生児科松田先生のラインで大方の情報収集、周知を行い、こども病院室月先生、医会、学会と連携する宮城県被災地周産期医療対策チームを検討中。



札幌からの救急車両



熊本赤十字病院より



トリアージ（黄）の患者さん多し。



避難所は、約15エリア



各エリアの災害カルテをチェックする千坂医師



大分赤十字病院からの激励の寄せ書き